

第5回京都市未来共創チーム会議 議事録

日 時：令和7年2月17日（月）13：30～14：40

会 場：河岸ホテル（1階イベントスペース）

出席者：

安野 貴博	合同会社機械経営CEO／AI エンジニア／起業家／SF作家
池坊 専宗	華道家・写真家
大井 葉月	京都市職員（東山区役所）
大竹 莉瑚	市民公募委員
杉田 真理子	一般社団法人for Cities 共同代表／都市デザイナー
田口 成人	京都市職員（環境政策局）
都地 耕喜	EVER 株式会社 代表取締役
三川 夏代	株式会社メルカリ 『mercari R4D』

以上8名
（五十音順、敬称略）

1 開会

2 議事

(1) 第4回京都市総合計画審議会の結果の共有及び来年度の活動について

司会

本日は、「未来共創チーム会議が大切にしたい思想・価値観」について、第4回京都市総合計画審議会に提出した際の審議会委員からの意見を踏まえ、修正すべき点や加えるべき意見、改めて整理したいことなどを議論していただきたい。初めに審議会委員の意見について、事務局から説明をお願いする。

荒木都市経営戦略室長

資料5に基づき説明

司会

続いて、実際に審議会に出席していた委員から補足していただきたい。杉田委員からお願いする。

杉田委員

全体的に全てのポイントに対してしっかりとフィードバックをいただき、非常に有意義な時間であった。いくつか率直に、「この部分はどういうことか」や「ここは違うのではないか」という意見もあり、それらも私たちの糧になると思うので、この場で皆さんと議論したい。特に小川委員の、「若者らしい、それこそデジタルネイティブらしい意見が意外と少なかった」という意見が大変印象的であった。議論を重ねる中で、野村特別委員から「同世代の記憶」という言葉も出たが、私たちの世代の中では伝わるような言葉遣いも、きれいにまとめて10分間でディスカッションする中で、良いか悪いかは別として、そういった言葉はどんどんなくなっていく。そもそも私たちはデジタルネイティブと言えるのか。もう少し下の世代かとも思うが、今らしい発言のようなものも意識して盛り込めるとよいかと思った。

また、審議会委員に向けて発表する中で、一つ一つの言葉を口にしてみると、少し違和感がある言葉もあったので、そういった部分をアップデートしていきたい。例えば、3点目の「脱成長・脱競争の社会へ」の部分について、資料5にもあるとおり、「脱でいいのか。経済は本当に抜けてしまっているのか」という意見もあった。確かに「脱」という言い方は非常に強く、アンチに聞こえてしまう。私たちが言いたいことは、脱成長や脱競争というよりも、より多様な成長や経済の在り方があるということではないか。

経済といっても、現在のネオリベリズムの中の経済だけではなく、より小さな地域経済のようなものもあり、そこから派生する豊かさの議論もあった。豊かさの定義も世代によって変わってきている。成長した先に何を豊かだと捉えるのか、幸せの風景だと捉えるのかということも、世代による差はどうしてもあるので、その辺りをきちんと言葉にして伝える

必要がある。例えば、私たちの世代は、にぎわいがあるから豊かというわけではない。マイカーとマイハウスがあることが豊かであるという価値観ではなくなっている。物を所有することが豊かさの象徴であるという意識も私たちの世代は全くない。脱成長の議論に関しては、そういった実感値を伴うようなものも、きちんと言葉にして伝えられるといいのではないかと思った。そういった意味で、言葉遣いを少し変える必要がある。

田口委員

全体の印象としては好意的に受け止めていただき、起草する野村特別委員にも共感いただけたと受け取ったので、ある程度反映はされると思った。杉田委員が話したように、細かいニュアンスについては、もう少し議論を詰められそうである。脱成長や脱経済、コミュニティもそうだが、言葉に込めている意味が審議会と未来共創チームで微妙に異なる。未来共創チームの中でもある程度ばらつきがあると思うので、全て詰めきれぬかということそうではないが、どの程度のところで合意や共感するのかは、議論の余地があると思う。

また、世代論にしても仕方がないとは思いつつ、50代から60代の委員の方々は、今の若者はそのような感じなのかと改めて驚かされている印象を受けた。一方、30代から40代の委員の方からすると、思ったよりおとなしいという印象を受けている感じがした。先ほど、もう少しZ世代の感覚も入れるべきかという話があったが、そのような目線をあえて入れることは、審議会との役割分担としてあると思った。

脱成長の話については、私も言葉の問題かと思う。ケアの話も出たものの、抽象的な議論であり、もう少し詰められそうである。

杉田委員

一つ言い忘れたことがある。野村特別委員から、「共創チームの中でこういった議論をまとめるに当たって、皆さんの中で責任意識、義務感みたいなところはどこまでありますか」と質問された。私としては、若い世代として括られつつも、それぞれ責任を持って活動しているメンバーが集まり、この下降する日本の中でこれからの未来を引っ張っていかなければいけないという「ひりひりとした焦燥感」を最初から持ってこの会議に臨んでいると答えた。

その辺りも審議会委員の方々は気にしているのかもしれない。私たちいわゆる若い世代が「これをお願いします」と思っているのか、それとも「私たちはこれをやりたいです。やるために道を開いてください。一緒にやりましょう」という方向性なのか、温度感をしっかりと伝える必要がある。

大井委員

私は、余白について触れられていることが多かったように思う。先ほどの説明でもあったが、「新しいものを受け入れる隙間」という言葉が個人的には大変印象に残っている。心の余裕や余白、遊びの幅を持つという話も出ていた。他には、「若い人たちは教科書的である」という意見があり、この会議の場において、自分がそうならないかということを改めて考えさせられた。

ハード面については触れられておらず、そこについても私たちは考えなければいけない。野村特別委員から、「身体性という言葉を書きたいが、他の言葉はあるのか」と言われたが、それは私たちに対しても投げかけられたものであると思っている。

大竹委員

若い世代が「教科書的である」とはどのような意味か。

大井委員

具体例として教習所の話が挙げられていた。教習所の中では運転できるが、外に出て運転すると、教科書のままではうまくいかないという意味である。マニュアル通りにしていても、必ず想定外のことが起きるので、そういったことに対応していかないといけないと思った。

大竹委員

野村特別委員が問いたかった答えと異なるかもしれないが、「若い世代が政治や社会に対して負わされている責任」に関して、最近「責任感」とは何なのかを考えることが多いため話したい。もしそれが、理不尽な責任を押し付けられることを指すのであれば、そのようなものは負いたくない。期待されること自体はうれしいが、この状況になっているのは私たちよりも上の世代の影響である。その価値観が根付いている中でこれまでやってきたものと同じように取り組んでも、立て直すのは簡単ではないと感じている。

経済の先行きが不透明で、少子化も進む中で、未来への責任を負うことを求められるが、それを若い世代に求める側はどのように責任を考えているのか。

求められるものに応える形の責任を持ちたいわけではないし、そもそも持っていない。自分の人生や、周囲の人が幸せになるための努力はする。それは社会的な責任を負うという話ではなく、自分自身の人生を充実させる責任を自分で負うということだ。誰かに幸せにしてみらうつもりもなく、行政に何かをしてみらうつもりもない。自分でつくり上げたい。だから、「こうなってほしい日本のために頑張る」という発想ではなく、自分が納得できる生き方をしていきたいと考えている。

田口委員

野村特別委員が責任の話をしたのは、起草する中で、「わたしたち京都市民」という主語にした時に、若者がどのくらい責任を負う感覚を持っているのかということを聞いたかったからではないか。要するに、「わたしたち京都市民」はこれだけのことをやりますと書いた時に、それを若い世代は自分ごととして捉えるのかという質問と解釈した。その意味では、大竹委員の意見は一つの答えになると思う。

大竹委員

責任は負わされるものではなく、自発的に何か芽生えるものだと思うので、「負えますか」という問いに対する答えは難しいが、自分が取り組んでいる分野に関しては全員持っている

と思う。責任を持ちたいと思えるようなものだったら持つという感じである。

杉田委員

近年、中国のZ世代に寝そべり族と言われる人々がいるようである。難関大学に入り、医者や弁護士になるように教育された人たちが、その責任が嫌になり、放棄して横になることで抵抗するという運動が起こっていると聞いた。そのように責任を放棄することで、抵抗の意思とする人が現代の若い世代に多くいると思っている。

また、向上しない未来への責任をどのように持てばいいのかという点が、この世代にとって非常に重要なテーマである。例えば、子供を持つか持たないかという議論の時に、主に欧米の同世代の友人の中には、地球の資源が枯渇していき、人間が地球を終わらせていく時代に、人間を増やすべきではないということで、子供を持たない選択をする人たちが多くいる。そういった意味で、責任をどう考えるのか、それを放棄することで抵抗するのかということについて、興味深い議論が出てきたと思っている。

池坊委員

これまでの審議会の草案が、理想的で、権利や義務の主体をしっかりと自覚しているような近代的な強い個人を想定しており、審議会委員の方々も、そのような個人の権利と責任を認識していたところ、未来共創チームの思想や価値観を読んで、トーンが違うなという話かと思う。権利も義務も裏表の関係であり、また権利を与えて義務を喚起するような、互いに刺激を与え合うような関係でもある。例えば昔は投票権や参政権がなかったが、現代はその権利が与えられている。それは政治に参加する大きな権利でもあるが、逆に、日本では義務にはしていないが、行使することがまた責任を全うするという義務的な側面も併せ持っているということで、権利と義務が結び付くようなことが重要であると思っている。経済性を放棄しているとか権利や義務をあまり感じていないというニュアンスを持たれたのは、少し誤解があると思う。市民が様々なステージ、あるいは様々な領域で、自治や政治、市民社会の構築に主体的に参加しているという自覚を感じてもらうことが、すなわち責任の全うや、豊かな京都市の構築につながっていくと思う。

故に、これまでの町内会や学区、あるいは地域のものづくり、伝統、そういったものが、1, 200年前から脈々と受け継がれてきている。それが現在少し衰えて、コミュニティが崩壊しそうになってきているが、それは逆に京都市の紐帯の一つであり、それに積極的に参加していき、自分自身が一人の市民で暮らしている中でも、何か貢献しているという風に組み直していくことが大切ではないだろうか。それがまた責任感や、これを受け継いでいかなければいけないものだとも認識すること、そしてそれが喜びでもあるという風につながっていく。責任感がないということではなく、お互い裏表の関係で、様々な多極的、多元的な層、あるいは活躍の場というものを再構築していくことが重要である。

安野委員

先ほどの大竹委員の話は、大変興味深く聞いていた。純粋に責任を負うことに対してメリ

ットが感じられないということもあるのではないかな。メリットを感じる事があればやるし、感じなければやらないという、シンプルな話をしている気がする。現代の若者からすると、ずっとそのまちに居続けなくては行けないというわけでもないため、他のまちに行く選択肢もある中で、なぜこのまちで責任を持つ必要があるのだろうかと思いやすくなっている。

そうなった時に、京都市の立場で京都市を良くしていきたいとすると、責任を負って頑張りたいくなるようなゲーム設計をどのように作ることができるのかという話が挙げられるのではないかな。何か直接のメリットがあるという形でもいいかもしれないし、自分が責任を負って頑張ることではしか守れないような価値観があり、そこにどうしても魅力を感じている人は頑張るとか、そういった形でも構わない。その設計が、例えば50年前と比べると大きく変わっていると思う。京都市としては、「数ある自治体の中からなぜ京都なのか」や「なぜ日本なのか」を考え、選んでもらうための頑張りをしなければならないし、選ばれた後に、その上で若者や次世代の人たちが、「責任を持ってこれを頑張るぞ」と言いたくなるようなゲーム設計、ルール設計をしないといけないと思った。

池坊委員

京都の土地や人と結び付いていくことに関しては、自分で決めることもあるが、流されてそうなることも多くあるのではないかな。先ほど、会場近くのコーヒーショップに行くと、若い人が1人でお店をやっており、新潟県出身であったが、学生時代に京都に来て、京都で就職し、独立してここでコーヒーショップを開業したそうで、本当は東京に出店したかったが、家賃が高いことや京都の人と結婚したこともあり、京都に出店したと話していた。

それも京都に根付く1つの在り方であり、学生の運命かもしれないし、パートナーや友人関係など、何が芽になるか分からないが、様々な蜘蛛の巣が張られていて、どこかに引っかかればいいと思う。そのような意味では、フック型の網の目を張ったり、あるいは、今ではあまり見なくなったが、時には行政がおせっかいに、「若いから参加しなさいよ」と言って、渋々やってみると意外と面白かったりすることもあるかもしれない。そういったプッシュとプルのいろいろな網の目を張ることがいいのではないかな。

三川委員

先ほどの話を聞いて、話したいことが2点ある。1点目は責任についてである。確かに向上しない未来に対して、これから生まれてくる子や、Z世代よりももっと若い子たちに未来の責任を負わせることは、既に心苦しい。とはいえ、こうしようと未来の方向性を支配することも間違っている。では自分たちに何ができるのかと考え、自分たちが未来から見て良い過去になるようとする努力はできる。それが未来にとって正しいか正しくないかという判断は置いておいて、良い過去になる姿勢を持つことに責任を負うという考え方はあるかと思う。もしかすると、責任の持ち方に関して、Z世代以前と以降の考えや価値観が少し異なるのかもしれない。

2点目は、責任を負いたくなるようなインセンティブについてである。私は、東京に住んでいたが、コロナ禍を機に大学時代を過ごした京都に戻ってきた。昨年出産したところで、

東京都が第1子の保育料無償化や無痛分娩の助成を行うと発表し、子育てをするなら東京の方がいいかもしれないと思ったこともある。それでも京都で子育てをしているのは、何か温かい京都らしいつながりがあるからで、仮に、また東京に戻っても、京都とつながりを持ち続けたいと思っている。ゲーム設計でいうと、京都らしいつながりやコミュニティがあるということは、長期ビジョンの言葉に何かしら残しておきたい。なぜ、心地良いつながりがあるのかというと、私たちの議論の中で出てきた言葉を使うと、余白とか、市民に委ねられているところがあるからである。コミュニティづくりは、ある程度、市民に任せられていると感じており、行政が無理やり介入しようとせず、手を貸してほしい時に、行政が場を貸したり、何かサポートをしたりする良い関係ができているから、コミュニティづくりもある程度主体的にできているのかと思う。

ゲーム設計の基盤はある程度できているので、それをきちんと市民の方々に伝えて、理解してもらい、「自分たちも、もっと自主的に動いていいんだ」とか「自主的に動きたいな」と思わせるようなビジョンの書きぶりやアピールが必要なのかと思った。

都地委員

各世代によって、どのような責任までなら負っていいのか、何を求めているのかといったところが、これからゲームをつくっていく上で重要な要素になってくると思う。要は、求めているものと責任の定量化がこれから求められていると感じている。私は現在28歳だが、どのような責任を負わされるか、どういった活動ができるか、子供を持った時にどういった支援を受けられるかは大きな選択肢になってくる。もっと言うと、それは家族だけではなく、法人にも当てはまると思う。経済活動をしていく上で、自分たちが関わる産業が本当に成長していくことができるのか、そもそも新しいシーズが生まれるような環境なのかといったところで、活動しやすいゲーム設計が必要になってくる。各世代、各人格において、どういった責任を負うべきか、どういったまちを選ぶことで恩恵を受けられるのかという部分が定量化されると良いと思う。

大竹委員

私は大学を3回生で休学するまでは、京都を離れたいと思っていた。コロナ禍で大学生活を十分に楽しむことができず、当時は京都の魅力も理解しておらず、つながりもほとんどなかった。しかし、今、京都に残りたいと思う理由は、チャレンジできる環境があることに尽きる。それは、「私たちの世代が教科書的である」という議論にも通じるものがある。そもそも、マニュアル通りの生き方が正しいとされる教育のあり方も昔から変わっていない。それに加え現代では、ポリティカル・コレクトネスによって自由な言論がしにくくなっている。SNSが身近な時代になり、常に他者の目線にさらされることで、少しのミスでも大衆から非難される文化が広がった。その結果、自分の発言に対する責任を強く意識せざるを得なくなり、責任疲れしている人も多いだろう。みんなと同じように同じことができるようになる教育は変わっていない一方で、それではだめだと、今になって急に個性や自分の意見を持つことが求められているように見える。そうはいえど、実際には個があることと同時に、場の

バランスを取れることが暗黙のうちに期待されている。そのダブルスタンダードな状況では、発言しづらいと感ずること多い。テレビの内容も昔とは大きく変わり、社会全体として「教科書的」になっている側面がある。発言の許容度合がどんどんなくなっている。

だからこそ、若者が社会に期待しているのはチャレンジできる環境である。何をするにせよ、権威や権力を持つ人たちの許容がなければ実現できない。どの組織でも、上層部の人々が「自分が責任者であるうちは波風を立てずに穩便に終わりたい」と考えてしまうと、若い世代がどれだけ新しいアイデアを出しても、上に届く前に止められてしまう。学校教育でも、企業でも、結局は上の世代が変化を抑え込んでいる場面が見受けられる。そのような状況の中で、彼らが私たちとともに責任を負ってくれ、みんなが「失敗してもいい」と思うことができるかどうか私たちの挑戦のしやすさに直結する。

これまでの社会は、まるでサッカーのゴール前にボールを置かれ、「あとは蹴るだけ」という状態が続いていたように思う。間違えないように、転ばないようにとレールが敷かれ、最後にシュートを決めるだけの環境だった。社会は変わりつつあるのに、自分でボールを運ぶ経験がないまま、失敗も許されない雰囲気がある。

大学を休学し、地域での活動を始める前は、自分は何もできないと感じていたが、地域に入り、人と関係を築き、多様な働き方を目にする中で、自分で動く中で初めて理解できることが増えた。だからこそ、まちには、特に京都という場所には挑戦を許容する度量を持っていたほしいと強く思う。

都地委員

私にとって、京都は失敗を許容してくれる環境である。2015年に大学進学して以降、スタートアップとして2回活動してきた。その中で苦しいことも経験してきたが、京都の人たちは、新しいことに挑戦することに対して共感してくれる人が多いので、挑戦しやすい環境であると感じる。

特に学生が何かをしようとした時に、サポートしてくれる企業は多い。そのため、学生自身がきちんとビジョンを持ってつながろうとしているかどうか重要である。きちんとビジョンを持って逆算して、本当につながろうとすると、行政の方も法人の方も手を差し伸べてくれるし、そこで失敗したとしても、いろいろな角度からサポートしてくれる人たちは必ずいるので、それをもっと多くの人に知ってもらう必要がある。

大竹委員

確かに同世代でスタートアップをやっている学生は多いが、私が感じているのは、ビジョンを持った若い人しかできていないのではないかとということである。私も含めて、ビジョンは描けないが、何か持っている人は大勢いるので、そのような人たちも引っかかるような網の目があると良い。すごいものを持っていなくても、何かやりたくなるようなまちであると良いと思う。

杉田委員

その話については、前回の審議会でも小川委員も言及していた。世界中でいろいろな学生を集めたカンファレンスをした時に、フィリピンやインドから来た人たちは積極的でがつつし感じがあった一方、日本人はあまりがつつししていないくて、傍から見ると大丈夫なのかみたいなことも思ったが、そういったある種の曖昧性や、空気感、ハイコンテキストのような部分を再評価する方向性もあるのではないかという話があった。若者だからもっとがつつすべきというのも、また違う。そうではない世界線がもっとあってもいいのではないかと思った。

田口委員

小川委員が話していたのは、確かにがつつしているが、そのコミュニケーションが必ずしもうまくいっているかという、別にそうとも限らないということが微妙に分かってきているという話だと理解した。だからどちらのコミュニケーションの在り方もあるのだと思った時に、東京も京都もそうだが、がつつしていないコミュニケーションの在り方や、スタートアップの在り方を模索するというのがなきにしもあらずという意見なのかと思った。

大竹委員

経済のこともきちんと考える必要があるという意見があり、そのとおりだと思うが、がつつしている人の方が稼げるだろうし、私がやりたいようなことは、経済合理性を見いだしにくい活動だと、やりながら感じているので、資金の面も苦労している。しかし、コミュニティがなければ浸透していかないので、どちらも必要だと思う。経済の重要性も理解しているが、みんながそこを目指す必要はなく、このように草の根的に、つながりとか、緩くやっていきたいと思う人たちもいるのが魅力である。そういった人たちの下支えがあるから浸透していく部分もあると思うので、お金になりにくい活動も、意外と全体を見ると重要だと思っている。

杉田委員

そのとおりで、前回の審議会でも、今日の議論でもあまり話が出てきていないが、ケアの話もそこにつながってくる。どちらが正しいかという話ではなくて、経済合理性では捉えにくいような人々のつながりや助け合いも必要であると伝えたい。

都地委員

私もどちらか一方だけではなく、それぞれの人たちがいて良いと思っている。少なくとも、京都の企業はどのようにサステナブルに生きていくかということを考えていると感じる。東京のスタートアップのモデルを見ていると、やはり貪欲さが非常にあり、グリードな状態ではあると思うが、例えば京都で経営していく上においても、持続性をつくっていくためには、ある程度の収益は必要になってくる。要はボランティアでは成り立たない。そのため、ボランティアで成り立たない中で、どうやって持続的にその活動を続けていくことができるかは

考えていくべきであるが、そこで本当に食欲にならなくてもいいというところである。本当に企業のあり方の多種多様さをある程度担保できたらいいのかと思っている。

杉田委員

持続可能性をつくるために、ある程度の収益性が必要というのはそのとおりと思いつつ、だから京都が東京のようにならなければいけないとか、サンフランシスコのようにならなければいけないという話ではないと思う。京都はシリコンバレーには絶対になつてはいけないと私は思う。どのように責任を持って関わりたくなるようなゲームの設計をするのかというところに話を戻すと、今までは選びたくなるまちのクライテリアが均一的であった。例えば、職があるとか、行政サービスが充実しているとか、スタートアップに対して税制の優遇があるとか、いわゆるスマートシティー的な考え方がクライテリアとしてあり、それをいわゆる西洋近代的な都市モデルに則り、京都でさえも、今までそれを目指してきたかと思うが、何か違った世界線であり、そもそもゲームやクライテリアが全く異なるのではないか。行政が介入してこないとか、地域コミュニティが元気であるとか、チャレンジできる環境があるとか、それはスタートアップもしかりだが、ゲームの設計、ルールをいかにシフトできるかという議論ができるといいのではないか。

田口委員

ゲーム設計の話は、仕組みや前回の話でいうと、都市のハードをどうするかという具体的話になる。ビジョンの話に戻すが、國分功一郎氏が責任の話をしていて、要は結果に対して、そうなる原因をつくった人や、そこに対して意思を発動した人に責任があるとされるが、國分先生が言っているのはそうではなく、応答できる状態にある人が発動する責任というのが責任なのではないかという言い方をしている。その意味では、大竹委員は自分の応答可能性にセンシティブであり、やる気があるなと思っている。それで良いのではないかと思った時に、先ほどのがつがつしたという話もそうだが、それはそれで必要であり、その人たちの責任がある一方で、そうではない役割の人、その人たちも支えられるし、逆も支えられている関係性がネットワークや網の目の話であり、余白の話なのかと思っていた。

大竹委員

バラエティがあるということは、責任が分散されている状態である。一つの形に統一するのではなく、資金を生み出す場や動き、組織が必要なのはもちろんだが、地域社会の網の目を広げるような役割を担う人も重要である。だからこそ、ルールの設定が大切になる。お金を稼げる人や資金を持ってこられる人が社会のヒエラルキーのトップに立つという空気が強くなれば、どうしてもそうではない人たちは生きづらくなる。それをどのように調整し、皆がお金稼ぎ以外の部分の重要性を理解できるかが問われる。そしてその価値観を共有できるかどうか、居心地の良さにつながるだろう。先ほどの「寝そべり族」の話もあるが、それも一つの生き方である。京都は、チャレンジや許容を含め、自由に試行錯誤できるあそびのある場であってほしい。

司会

時間があれば議論したかったが、長期ビジョンを市民の皆さまにどのように伝えていくのか、どのように行動を促していくのかということについて、次回以降、議論していきたい。最後に、松井市長に一言いただきたい。

松井市長

大変興味深く聞かせていただいた。皆さん議論の中で難しいなと思ったのは、超長期目線で考えるということである。過去は歴史をいろいろ振り返ればある程度分かるが、京都が都であったという平安時代から含めて考えるだけでも、実は相当な歴史の勉強が必要で、それはそれで大変なことである。しかし、より大変なところは、ポストモダンの社会の在り方として、京都というまちはどのように生きていくのかを議論することである。ポストモダンという言い方をする時には、基本的には中世から近世、そして特に我々が意識しているのは、近代のシステムである。そして近代を乗り越え、戦後、成長という概念の中で、物事を拡大し、曖昧にしながら処理していくことによって、右肩上がり成長することで問題が解消されるという認識が昭和の我々の世代には何となく染み付いている。それが必ずしも前提とならない時代においてどう生きるかということで、ポストモダンという言葉を用いたが、向こう1,000年を予想するのは非常に困難で、真面目に考えればやや傲慢でもある。京都大学の山極先生と長期ビジョンの話をした時に、5年先のこともなかなか予想ができないのに、25年先を見据えた議論をするのは少し傲慢ではないかという議論があった。真面目に科学者と議論すると、そういった意見が出るほど実は難しいことだと思う。

その中で今日の議論の仕方も含め、我々が提供しているフレームワークは、やはりモダンなフレームワークである。要するに、総合計画審議会の中で、審議会委員の方々と話をしながら、最終的にまちづくりの方向性を行政計画という形で作り、それを市民に訴えかけるとい進め方は、現代社会の仕組みである。だから、その中で皆さんの意見をどのくらい消化するかというのは一つの面白い試みだと思っている。

私が言いたいことは、あまり総合計画審議会の意見を気にせず議論していただきたいということである。審議会委員は、それぞれの持っているものを踏まえて、責任感や教科書的という言葉を使っている。堀場委員が教科書的という言葉が使われたのは、恐らく堀場委員が会長を務める堀場製作所の社員の7割は日本人ではない人たちで、その人たちと議論をしている中で、もっと突き抜けてもいいという、ある種のエールを送っていると受け止めていただきたい。それから、野村特別委員とは、私も相当な時間議論してきたが、彼はポストモダン的な問題意識を持っており、発展史観というものに対して、あるいは二元主義的な西洋的な感覚に対してはアンチテーゼを持っている人なので、その彼が言う責任感を字面だけで、皆さんに対して責任感がないのではないかと言っていると捉えなくていい。

私がお願いしたいのは、皆さんには自由に議論をしていただきたいということである。その中でモダンな総合計画審議会が取り入れられることに限界はあるかもしれないが、その限界にとらわれず、すり合わせすることを考えずに議論していただきたい。

事例を1つ挙げるとすると、宇沢弘文先生という方がいて、この人の有名な著書に、自動

車の社会的費用という議論がある。自動車は便利なモビリティだが、公害、交通事故、交通渋滞のもとになる。従って便利だが、自動車という文明の利器が及ぼす社会的デメリットをどのように解消するのかということを問題提起した有名な著書である。しかし、京都市が昨年からトヨタ自動車と話をしているのは、自動車に設置したドライブレコーダーから火災の状況を把握するシステムで、社会的費用というより、むしろ社会的共通資本としての自動車の可能性が出てきている。

要するに未来のテクノロジーの進化を考えた時に、先ほどの話でいうと、京都に新しい住民や企業を呼び込むために、税金の減免措置など様々な取組を実施しているが、では京都というまちのコミュニティに愛着を持っていただくために、どのような手段があるのかという具体的な提案をどんどん言っていただく方が、モダンな総合計画審議会という位置付けの中で長期ビジョンを議論する私としては面白い。もっと材料を出していただきたいと思うし、抽象論なども重要である。価値論として、従来のモダンな社会に生きている我々が出し得ない価値観を出してもらうのも大事だが、同時にこのようなことができるのではないかという具体的な議論もしていただきたい。

例えば、安野委員が話していたような、システムとしてこういったメカニズムで京都にコミットしようというものを具体的に討議していただいてもいいかもしれない。長期ビジョンに書けるか否かは別として、ゲーム設計をどう変えるとそれが実現できるか、こういったゲーム設計をすべきではないかということを議論していただきたい。三川委員がおっしゃるように、東京は無痛分娩の補助があり、第1子から保育料が無償になる。このような議論をしていくと、京都は財政力のある自治体には勝てない。しかし、財政力には限界があるが、京都ならではのゲーム設計、インセンティブ付けというものは考えられるかもしれない。2050年を見据えたビジョンだが、2050年に有効ということは、2050年時点で25年前にこのような提案をしたということを次の世代を巻き込んで、同じような議論をすると思って、新しいゲーム設計や新しいインセンティブを考える時に、こういった指標やこのような分野での人々の関わり方を考えていただけるといいと思う。

どうしても我々は2025年時点の総合計画審議会という条例に基づいた会議体や毎年予算提案をする市会で議論するという前提だが、その前提自体もポストモダンなものになっているかもしれない時に、どのような価値観を訴えて、どのような価値観を刺激することが、人々に京都の町への愛着を持たせるのか。それは我々より前の昭和の時代とか、あるいは大正とか、もっと近代とか、あるいは近代より以前のものをもう一回復元させるということも含めて問題提起してもよい。

私の結論としては、審議会との接続を意識せずに、具体的にこういったことをもっと京都市で仕掛けたらどうかと自由に議論していただきたい。それは2025年時点の総合計画審議会が考える長期ビジョンに100%生きるかどうかは分からないが、ブレーキをかける必要はない。堀場委員が教科書的と言及した真意は、「もっと言ってもらっていいよ。世界中の若者はもっとがんがん議論しているよ」という意味かもしれない。

今日の議論は非常に面白かった。面白かったというのは、当然かもしれないが、皆さんが審議会委員の方々の発言を結構気にしていることがわかったからである。審議会と未来共創

チームを兼任している杉田委員の立場は、互いの議論をしっかりと伝えなければならず、一番大変である。その立場で杉田委員に取りまとめていただいたから当然だ。それでも、例えば、もし自分が京都市長だったら、現代の法律では許されていないかもしれないが、こういった制度を作りたいと言っていたと、私にとっては刺激になる。実際、議論を聞きながら、皆さんから出たキーワードをいろいろと書き留めた。ここで議論したことは、皆さんにとって将来の糧になるはずで、傍聴している市民の皆さんにも、京都市ではこういった議論をしていることを知ってもらうことで、様々な人たちにさざ波のように影響を与えることを期待している。もっと具体的な提案をしていただけると、私だけでなく、将来の市長にとってもネタが増えると思う。本日も議論していただき、改めて感謝申し上げる。

司会

これをもって、第5回京都市未来共創チーム会議を終了する。

(2) 事務連絡

3 閉会